

## 緊急派遣スクールカウンセラー による熊本地震での被災地支援

姫島源太郎

### 緊急派遣スクールカウンセラー から見た子どもたちの様子

二〇一六年四月十四日と十六日、熊本・大分両県を中心に最大震度7の地震が襲いました。九州地区が震度7の地震に見舞われたのは観測史上初めて、熊本県や大分県が震度5以上の揺れに見舞われることもここ数十年なく、それはすなわちほとんどの学齢期の子どもたちにとって初めての体験だったということの意味しています。

「おなかが痛い」などの身体症状の訴えが共通していたように思います。身体のみの不調というわけではないようで、〈それは地震と関係あるような感じがしますか?〉と尋ねると、みなうなずいていました。また、他のSCからは、子ども返りしているような言動があること、授業に集中できない子どもが多いようだ、という話を聞きました。もちろん、「地震が怖い」「また起こったらどうしよう」という声が多かったことは言わずもがなでしょう。

特に小学一年生は入学間もない時期で、生活習慣や学校生活が身につかないまま休校してしまったため、学校で泣いたりトイレに一人で行くことができなかつたり、大きく退行したところから再スタートとなった子どもも少なくなかったようでした。

同時に、「弟(妹)の面倒を見ている」「家の片づけをがんばりました」などのたくましく、気丈な言葉も多く聞かれました。さらには、「お父さんが助けてくれた」「お母さんが毎日ぎゅってしてくる」という家族に対するポジティブな言葉も多く聞くことができました。また、「友達に会えてよかった」「広いところ

■ひめしま・げんたろう  
一般社団法人福岡県臨床心理士会被害者支援  
〈災害対策領域担当理事。NPO法人九州大  
学〈こころとそだちの相談室理事。臨床心理士。  
専門は臨床心理学。九州大学大学院人間環境  
学府単位取得退学。九州大学心理教育相談室  
主任、福岡県スクールカウンセラー等を経て  
現職。著書に「不登校」(共著、金剛出版、二  
〇一〇年)、「現実に入らしつ心に開く  
〈展開編〉(共著、同、二〇一六年)など。

私は五月十六日から、熊本市への派遣スクールカウ  
ンセラー(以下、SC)として現地に赴きました。多く  
の学校は被災直後から休校を余儀なくされてしまっ  
た。私が勤務した学校はまだ体育館が避難所となつて  
おり、運動場にも自家用車で避難している家族の姿が  
見られました。一方で校舎内には子どもたちの元気な  
声も響き、あいさつしてくれる子どもたちを見て、ま  
ずはほっとしたことをよく覚えています。

### 子どもたちを取り巻く状況

そんな子どもたちを取り巻く状況はどのようなもの  
だったでしょうか。

保護者には「子どもが変わってしまった」と不安を  
感じている方が少なからずおり、その状態がいつまで  
続くのか、そのことが一番の気がかりなようでした。  
それは同時に、仕事や住居など、家族全体を取り巻く  
先の見えない状態がいつまで続くのかという、保護者  
自身の不安であるようにも受けとめられました。

教師は学校再開までに家庭訪問による安否確認と被  
災状況の把握、施設的安全確認、再開時に配布する学  
級通信の作成や被災後のケアに関する研修など、様々  
な例外的業務をこなしていたようです。再開後も未実  
施のままの各種行事(健康診断など)を限られたスケ  
ジュールでこなさなければならず、まさしく多忙の極  
みでした。さらに、休校中も避難所業務のため朝早く  
から夜遅くまで勤務していたとのことでした。学校は  
地域に最も近い公的機関のひとつであるため災害時  
は行政の窓口にならざるをえず、そこに勤める教師は  
地域への行政サービスの担い手になるのだということ

を改めて感じました。

校区全体に目を向けると、被災状況には差があり、建物数が多く被害を受けている一角もあれば、外からは特に被害を感じられない一角もありました。それは私が支援に行っている東日本大震災の太平洋沿岸部との違いを感じるどころでもありません。そのためか、一部地区ではほとんどの児童生徒が引越してしまっていたりして、コミュニティが様変わりしているように見えました。また、六月の熊本は豪雨に見舞われ、阿蘇地区などの地盤の弱まりが懸念されていた地域では地すべり、崩落が多発しました。まさしく地すべりのように、復興を支える土台がなかなか固まらない状況が続いているかのように感じられました。

熊本地震はそれまでほとんど耳にしなかった「前震―本震」からなる一連の地震であり、最初の大きな揺れからわずかに約三〇時間後に発生した再びの揺れへの驚きと恐怖には、想像を絶するものがあつたのではないのでしょうか。余震は八月末までに四〇〇〇回以上を数え、ほとんどの子どもは「またいつ地震が来るかわからん」と話します。今回の地震は、まさしくいつ終わるともされない、延々と続く被災と不安の中に留め

回復し、二次被害を予防するための応急処置的・後方支援の介入であり、その担い手のひとり外部からのSCということになるのです。そして特に、大規模な自然災害においては、他の都道府県を含む緊急派遣SCの体制がとられることとなります。

なぜ他地域からの派遣を必要とするのでしょうか。ひとつは人員不足によるものです。緊急支援で行うべきことは膨大であり、当該校の教職員や配置されているSCだけでは手が足りなくなります。特にSCは一人が複数の小・中学校に勤務していることが多く、それらを回っているだけで時間が足りなくなるとい現実があります。

さらにもうひとつ。これが大変大きな理由でもありますが、当該校の教職員やSCもまたコミュニティの一員であり、被災者であるということです。被災地に赴くと、消防や警察などの職員が安全確保のため最前線で働き、電気やガス業務従事者がインフラ復旧に取り組み、自治体職員が避難所の地域住民のサポートを行っている様子が見られます。彼ら自身が地域の住民であり、被災者であるにもかかわらず、です。教師自身が大変な被災を受けたという話も数多く聞かれ、そのような状況での例外的な業務の数々に、ほとんどの

置かれてしまった、ということが特徴的だったように感じられます。

### 緊急派遣SCとは

二〇一一年三月の東日本大震災の後、文部科学省は被災児童等の心の健康問題に取り組むSCの緊急支援を決定、それを受けて日本臨床心理士会は全国から派遣SCを募り、支援活動を行いました。熊本地震でも同様に全国の臨床心理士に呼びかけがあり、熊本市・県の現地SCとの協働体制がとられることとなりました（なお、大分県では県内他地域のSCがサポートするという支援体制を組んでいます）。

そもそもSCによる緊急支援とは何なのでしょう。窪田らは、「突発的で衝撃的な出来事に遭遇することによって、学校コミュニティが混乱し本来の機能を発揮できない状態に陥ること」を「学校コミュニティの危機」と定義し、そのような状態に陥ると学校コミュニティ自体の力だけでは回復が困難になるため、外部からの支援が必要だと提唱しています。緊急支援とは、学校コミュニティが持つ本来の対処能力を

教師が疲弊しきつているように見えました。緊急派遣SCは、不足しがちな現地の支援者の手となるべく、そしてその後の息の長い復興計画の軸となる彼ら自身を側面から支えるべく、派遣されるのです。

### 現地に入る

福岡県臨床心理士会では、五月十六日から熊本市に、六月六日から県域にそれぞれSCを派遣しました。派遣活動は本稿執筆の十月現在も継続されています。

私は福岡県臨床心理士の災害対策担当という立場から、発災翌日から九州沖縄の災害対策担当者らとの連携をとりつつ、県内では派遣コーディネイトと事前研修に取り組みました。五月一日に熊本県臨床心理士会主催の研修会に参加、そこで学んだことを中心に福岡県でも現役SCを対象に事前研修を実施しました。私自身も第一陣として組織された二十一名の九州沖縄の臨床心理士とともに学校に勤務し、六月六日には県の学校にも赴きました。冒頭の子どもたちと学校の様子、そのときに私が感じたことや他のSCから聞いた話をまとめたものです。

私が話を聞いた子どもの中に、前震を受けて自家用

車で学校に避難し、そこでの車中泊中に本震を経験したために「学校に来たくない、車もいや」と訴える子どもがいました。本来であれば安心できるはずの家族や学校に対してそのような感情を抱くというところに、今回の地震に遭った子どもたちの心のうちが垣間見えるかのようでした。

田嶋はマズローの欲求階層説(図1)を援用しながら、安心・安全こそが成長の基盤であり、それを整えることで成長のエネルギーを引き出すことができるとしています。その際、安心・安全とは心理的なものだけでなく、具体的・実的なものを前提としています。いつ終わるともされない被災で実際的な安心・安全が保障されないという中であつて、子どもたちの心理的支援を行うことがいかに困難か、SCCにいったい何ができるのか、という壁に直面することとなりました。

## ニーズを見立てる

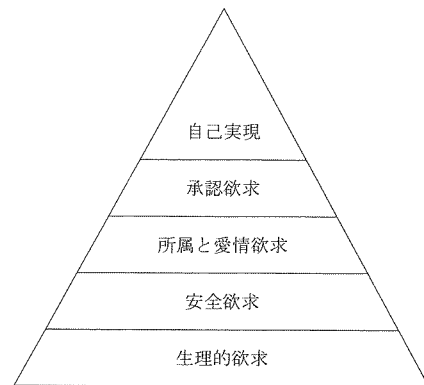
心理臨床では、「どう関わるか」に先んじて見立て(アセスメント)を行います。相手がどのような状態にあるのか、どのような問題を抱えているのかを丁寧

ロール体験、③心理教育体験、④生活体験の表現、⑤トラウマ体験の表現、⑥避けていることへのチャレンジを機を見て段階的に進めていくこと、を提唱します<sup>4)</sup>。

私は第一陣としてすべきこと、とにかく学校や子どもたちのニーズを見立てることに努めました。それも、子どもたちだけではなく、教職員や保護者のニーズです。緊急支援において重要なことに、教職員や保護者といった子どもたちをとりまく大人への支援があります。子どもは大人が不安な表情をしているかたわらで笑顔で過ごすことできません。緊急支援の目的はコミュニケーションが本来持つ回復力を取り戻すことですから、子ども同様に被災者である大人を支えることが必要不可欠です<sup>5)</sup>。

学校ではさつそく心配な子の個別面接などを要請され、そうした顕在化したニーズにこたえつつ、同時に潜在しているニーズを汲み取るべく努めました。多くの子どもが不安と恐怖を訴え、なかには、それを家庭で言ってもいいものかわからない、と話す子どももいました。一方の大人には、子どものことを心配しながらも一緒にいられる時間的・心理的余裕がないという人

図1 マズローの欲求階層説



に、正確に見立ててから介入する必要があります。

兵庫県教育委員会震災・学校支援チーム(EARTH)によれば、被災直後の子どもはまずマヒや逃避、無感覚などの状態になりやすくなります。そしてフラッシュバックなどの再体験やなぜ自分に起こったのかという理不尽さへの怒り、イライラなどの過覚醒状態が起こり、その後抑うつ的になったり、自責の念や無力感、マイナス思考に苛まれることもあるようです<sup>6)</sup>。富永はそうした心理的变化をふまえ、心理的ケアに必要な体験として、①安心安全体験、②心身コン

もいました。

そこで私はまず自己紹介と派遣SCCにできること、そして起こりうるストレス反応をまとめた文書を教職員と保護者に配布しました(図2、図3)。災害直後は情報過多になりがちで、「頭がいっぱい」という状態になりやすくなります。そのため、内容はできるだけ絞ることにしました。子どもたちが見せる姿は災害直後の一過性の反応であり、「異常な状況での正常な反応」であることを説明することで、少しの安心と心のゆとりを持つてもらおうと考えました。

心理的支援は身体の回復と生活の安定の後でなければ十分に効果が出ず、また、押し売りで行われるべきものではありません。必要なタイミングで利用してもらえるように、まずはSCCの「使い方」を知ってもらうことを念頭に置き、特に教師に対しては、対応した子どもの様子を見立てを伝えるコンサルテーションを行うことで、その後の見通しを持ってもらえるようにしました。

できるだけ丁寧にニーズを汲み取り、こちらが用意したことや「やったほうがいいこと」ではなく、現場が必要とすること・受け入れ可能なことを提供するこ



とを心がけて活動を進めました。

### 派遣SCを意義あるものとするために 現地に迷惑をかけないために

これまで論じてきたように、災害時の緊急派遣SCはある種の特異性を持った活動であり、その特徴を理解して活動する必要があります。その特徴とは「外部性と一時性」という点になると考えます。

外部性とはそもそもその心理臨床の特徴です。心理臨床家は治療者とクライエント（来談者）との関係性を重視して一定の距離を守り、いわば「身内」になりきらないところにその立場を置いていきます。その位置にあるからこそ、クライエントは不安や攻撃性を向けられると言えるでしょう。ただし災害支援の場合、そのことは「あなたに何がわかるのか」という気持ちにもつながりやすくなります。この気持ちは当然のごとく生じるものであり、そう思わざるをえないほど、説明のつかない理不尽さが襲ってきたことからくるものと理解することができると考えます。

次に、一時性です。派遣SCは時に「また来てください」という言葉をかけられることがあります。そのSCだけで抱え込むことを防ぐ意味でもあります。さらに、それに先んじて派遣元でやっておかなければならないことは、事前研修による派遣SCの均質化です。同じ学校・子どもに対して見立てが全く異なったり、動きがばらばらになったりしないよう、組織的に取り組んでいかなければならないことでしよう。

### 派遣SC活動を可能にしたもの

本活動を可能にしているのは、何よりも全国からのSCをコーディネートしている教育委員会と熊本県臨床心理士会のご尽力です。必要な情報を全国に発信し、同時に管内の学校のニーズを確認しながらシステムを作る作業は並大抵ではありません。特に派遣初期は、宿泊先や交通手段もままならぬ状況の中でそれらの手配まで担っていただきました。このような体制なしに派遣SCは活動することはできないでしょう。

また、九州沖縄の臨床心理士会では、二〇一五年に災害対策担当者が集い、意見交換の場を持っていました。すでに顔見知りになっていたので、すみやかにネットワーキングができたと言えるでしょう。災害対策で最も重要なことは、普段からの備えであると言わ

言葉自体はともありがたいものですが、そうは言っても最後まで伴走することはできず、引き上げ時は必ずやってくる。派遣SCがいることで子どもたちが元気になったのではなく、いなくなっても子どもたちが元気でい続けられるよう、活動に工夫が必要です。加えて、チームを組織してリレーしていく点も特徴のひとつです。本来、心理臨床は同一の担当者が同一のクライエントを対象として展開されます。しかし、緊急派遣SCの場合、遠方からの派遣ということもあってSCが一週間程度で地元に戻ってしまい、次に学校に来るのは別のSC、ということがしばしば起こります。支援者が毎回替わっていくことはデメリットにもなりうるため、各都道府県の臨床心理士会などの派遣元がその難しさを最小限にすべく十分な工夫と配慮をする必要があります。

その際に重要なのは、引き継ぎと情報の共有です。守秘義務があるため個別記録は学校と担当機関のみで保管しますが、多くの都道府県はメーリングリストなどでそれ以外の活動の状況や体験を共有しています。また学校に対しては、その日のうちに担任教師等に報告します。これには支援の中心はあくまで学校であり、

れます。あらかじめコミュニケーションという備えがあれば、チームは格段につくりやすくなります。今後

も地域内・地域間でコミュニケーションをはかりながら、支援者・受援者のいずれの立場になってもすぐに手を携えられるような関係をつくり続けていきたいと考えています。

#### 〔文献〕

- 1) 福岡臨床心理士会（編）『学校コミュニティへの緊急支援の手引き』金剛出版、二〇〇五年
- 2) 田島誠一「現実と介入しつづつ心に開く——多面的援助アプローチと臨床の知恵」金剛出版、二〇〇九年
- 3) 震災・学校支援チーム（EARTH）事務局「EARTHハンドブック（平成27年度改訂版）」兵庫県教育委員会、二〇一六年  
<http://www.hogo-c.ed.jp/~kikaku-bo/EARTHHandbook/>
- 4) 富永良喜「災害と子どもの心のケア 災害後に必要な体験の段階モデルの提唱」『臨床心理学』11巻4号、二〇一一年、五六九—五七四頁
- 5) 高田哲「災害が長期化した際の子どもの健康へのケア」『教育と医学』二〇一一年十一月号、三〇—三八頁
- 6) 廣川進「惨事ストレスケア」『臨床心理学』11巻4号、二〇一一年、五四—五十六頁